

# 井上靖『猟銃』の中の人間の孤独

漱石『こころ』を通して

三十三回生 四号 井手上 理恵

## 序

夏目漱石の『こころ』と井上靖氏の『猟銃』は、共に「人間の孤独」というテーマのもとに物語が展開しており、登場人物も対応する。また、『猟銃』が書簡体小説であると同様に、『こころ』も「先生と遺書」に限って言えば、遺書という書簡の形をとって進められているという点においても一致する。しかし、このように似かよった型をとりながらも、二作品は最も重要な部分で大きな違いを見せている。それは、主人公達の運命の違いである。『こころ』の主人公である先生は自殺し、『猟銃』の主人公である三杉穰介は、自殺を考えている様子もなく生き続けるのである。この運命の違いは、二作品が「人間の孤独」という同じ問題から出発しながら、全く別の結果に辿り着いたことを示しているのではないだろうか。

そこで私は、何故『猟銃』でそのような違った結果が生み出されたのか、井上靖氏の捉える「人間の孤独」とはどのようなものであるのかを、夏目漱石の『こころ』——「先

生と遺書」を踏まえながら考えていきたい。

## 第一章

### 第一節 Kの自殺と「人間の孤独」

(略)

### 第二節 先生の自殺と「人間の孤独」

私は、第一節において、Kの自殺は「孤独」から引き起こされたのであって、失恋のためでも先生に裏切られたショックからでもないとした。Kの自殺がそれらに関係ない以上、先生の自殺理由も、Kに対する贖罪と結びつけて考える必要はないだろう。福本彰氏によると、漱石は、ニーチェの『ツアラッストラ』に「言葉の其の意味における『贖罪』はあり得ない。我々がやったことはもう取り返しがつかないのだ。口にしたことは再び腹におさめ得ないのだ。どうやってそれをあがない得るのだ。(後略)」<sup>(注1)</sup>という書き込みをしているそうである。即ち、ここで漱石自身贖罪観というものを否定していると考えてもよからう。しかし

ながら、贖罪以外の何らかの意味において、先生の自殺が、Kの自殺と深い関係があるのは確かであろうである。

先生は若い頃、信頼していた叔父に財産問題のことで裏切られたために人間不信に陥った。しかし、ここでいう人間不信とは、他人に対してのみ向けられたものであった。

「敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者の如く考え」（十二）ていた先生は、当然のように、「人類」という枠の中に自分を含めてはいなかったのである。そして、人間不信から生じた厭世観も、あくまで先生を包囲している環境に対して向けられるもので、決して先生自身の内部に向かうものではなかった。ところがKの自殺によってこれに狂いが生じてしまう。かつて叔父が先生を欺いたと同じく、先生もKを欺いてしまったということ——つまり、「いざという時悪人に変わる」<sup>(注2)</sup>のは、他人ばかりではなかったということが、Kの自殺によって、動かし難い事実としてあらためて目の前につきつけられたのである。「世間はどうあろうともこの己は立派な人間だという信念」（五十二）が「Kのために美事に破壊されてしま」（同）い、他人に見つけていたのと同様のエゴイズムを自分にも見ってしまった先生は、今度は自分の内部にも人間不信を向けなければならなくなったのである。他人を自分の世界から拒絶していた先生は、同じ論理で、自分すらも拒絶しなければならなくなってしまった。

自分の世界から自分を拒絶するということは、最後の拠所を失ってしまうということである。つまり、ここで先生

は、遂に完全な孤独の状態となるのであった。

このような抜き差しならない状態に陥った先生を救う手段は、はたして何もなかったのであろうか。いや、一つだけあったと思われる。それは、先生さえまだその神聖さを信じて疑わなかった男女のつながり、言い換えれば「愛」に縋ることである。そして、それはこの場合、最愛の妻静にすべてを打ち明けることを指す。なぜなら、忌むしい過去を共有することによって、二人の間に理解と連帯感が生じ、その理解と連帯感によって少なくとも先生は、「孤独」から抜け出ることができからである。と同時に、先生自身によっていったんは拒絶された自己も、妻の理解によって再び肯定されることになるのである。しかし、先生は打ち明けられない。救済が予想されながら、敢えて過去を妻と共有しようとしないのである。「ただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから」（五十二）というのが、先生の沈黙の理由である。越智治雄氏は、これを「先生もまたかつてはいわば純白でも素朴でもあった。そしてやはり生まれたままの姿に帰ることは許されない。そうだとすれば、ここで先生は奥さんに自身の現在と同様の地獄への道を歩ませたくないののである。先生の妻への告白のためには（中略）自己の救済のために妻を少しでも傷つけることにエゴイズムを見いださざるを得」<sup>(注3)</sup>なかつたからと解釈しておられる。だが私は、ここでどうしても一つの疑問にぶつかってしまうのである。はたして、先生の沈黙によって、妻静は先生と同様の地獄への道を歩まずに済んだと言える

のだろうか。少しも傷ついていないと言えるのだろうか。いや、先生が自分の過去を妻に明かさない時点で、既に妻は、先生と同様の地獄——少なくとも「孤独」という地獄を味わっているのではないだろうか。「男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうか」(五十四)と先生に言った後「やがて微かな溜息を洩らし」(同)た妻の姿に、先生と心を一つにして生きていきたいと強く願いながらも、それを一方的に拒否されてしまった淋しき、言い換えれば孤独感がうかがえるではないか。妻にしてみれば、先生が自分の過去を告白してくれることこそが、「孤独感」からの救済につながるのである。とする

と、「妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかった」ために告白しなかったという先生の論理は、必ずしも妻の論理とは成り得ないのであって、あくまで先生の側から見た一方的な、ある意味でエゴイスチックな論理とも言えるのである。

結局、先生は、自分の論理によって最後まで沈黙を守り、そのために「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していかないのかと思うと、悲しかったのです」(五十三)というように「孤独」から抜け出ることがなかったのだが、その裏で、同じように妻の「孤独」も存在し続けていたことを無視するわけにはいかないだろう。そして、たった一点においてでも相互理解の成り立たない関係、それによってお互いが孤独感を持ち続ける関係は、決して完全な愛の形ではないのである。江藤淳氏

は、「漱石は明らかに『愛』の可能性を探索するより、その不可能性を立証しようとしている。人間的愛の絶対的必要性を痛切に感じながら、それが同時に絶対的に不可能であることを、全ての智力を傾けて描いている<sup>注4</sup>」<sup>4</sup>と云っておられるが、ここでもそれが当てはまっていると考えてもよからう。

先生の、妻を思いやっつての沈黙が、結果としては妻に孤独感を抱かせたのだと私は述べた。しかし一方、先生が告白した場合、妻を「孤独」から救済し得たとしても、代わりに別の地獄が待っていないとは断言できないのも事実である。つまりは、先生がどう動こうとも、そこには絶えず何らかの意味において妻の犠牲が存在すると考えてよからう。自分の意志にかかわらず、他人の犠牲なしには動けない存在。他人の犠牲なしにはあり得ない存在。それが人間であることを、先生の姿は如実に物語っている。そして、そのような人間の存在こそが「私はただ人間の罪というもの

を深く感じたのです」(五十四)と先生の言うところの「人間の罪」なのではないだろうか。

人間は、孤独のままでは生きられない。しかし、どう動こうとも、結局は他人を傷つけずにはおかない程エゴイスチックな存在が人間の存在であるならば、極力孤独なままですじとしていなければならない。先生は、この矛盾に苦しんだ結果、「孤独」と「人間はエゴイスチックな存在である」という二つの問題から一挙に脱出する手段として死を選んだのではないだろうか。ただ、ここではつきりさせ

ておかなければならないことがある。それは、「私だけが居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした」(五十五)という先生の言葉にもうかがえるように、先生の自殺が、やはり妻の未来を犠牲にせずには成り立たないということである。とすると先生の自殺は、先生自身から見れば問題の消去に過ぎず、人間全体から見れば問題の保留に他ならない。

## 第二章

### 第一節 彩子の自殺と「人間の孤独」

(略)

#### 第二節 三杉穰介と「人間の孤独」

三杉穰介の愛人であつた彩子は、彼との關係を「虚構の恋愛」だつたと告白して自殺してしまつた。また、三杉の妻みどりと姪の薔子(彩子の娘でもある(筆者注))も、彩子の死後まもなく、三杉に対して別れの手紙を送るのである。このように、三人の女性から別れをつきつけられた三杉は、人間關係という点から見て「孤独」になつたと言つてもよからう。しかし、三杉と「孤独」を考へる上で見逃してはならない点は、実はそれ以前から、三杉の中に「孤独」が存在していたということである。猟銃を持った三杉の姿を、「ひどく孤独なもの」(十三頁)と感じ、「猟銃」と言うものと、人間の孤独と言うものの關係に、詩的感興をそそられ(八頁)た「私」に対して、「そもそも私が狩猟に興味を持つに至つたのは数年の昔に遡り、現在の天

涯孤独の身とは異り、公私兩生活において先ず先ず破綻なき時期、既に猟銃は私の肩になくはならぬものようであつた」(十四頁)と、三杉自身が語っていることが、それを証明している。しかも三杉のこの告白は、三杉が、三人の女性から去られる以前に「孤独」を感じていたというだけでなく、逆に言えば、三人の女性の存在すらも、彼の「孤独」を埋めることができなかつたのだということにならないだろうか。そして、三人の女性のうち、誰一人として三杉の「孤独」には気づいていないのである。「大体貴方は孤独というものに御縁がない。淋しがりやのところがちつともない。つまんなさそうなお顔はなさつても淋しそうなお顔はなさらない」(三十三頁)と妻のみどりは言い、十三年間愛人であつた彩子でさえも、自分の「孤独」を告白するばかりで彼の「孤独」を理解している様子はない。しかし、彼女達が三杉を理解していなかつたのとは裏腹に、三杉の方では、彼女達を理解していたようである。なぜならば、三杉はかつて彩子に対して「人間は誰も身体の中に一匹ずつ蛇を持っている」(五十三頁)と指摘しているからである。

「人間の持っている蛇」——彩子はこれを、「ある時は我執、ある時は嫉妬、ある時は宿命、恐らくそうしたものを全部を呑み込んだ、もう自分の力ではどうすることも出来ない業のようなものでありませんか」(六十一頁)と考へている。そして、「兎に角貴方があの時仰言つたように、まさしく私の身体の中には一匹の蛇が棲んでおりました」

(五十四頁)と三杉の指摘通り自分の中にも蛇が存在していたことを認めるのである。更に、その後、実は、三杉と不倫の関係を続けてきた十三年間というもの一度として前夫門田一郎を忘れたことがなく、三杉への愛も結局偽りのものでしかなかったことを告白しているのである。一方、妻みどりも、三杉に宛てた手紙の中で、彩子と三杉との不倫の関係を始めから知っていて黙っていたのだと告白している。つまり、彩子もみどりも心に秘密を持っていたのである。そしてその秘密とは、他人を欺すことよってしか維持できないものだったのである。実際彩子は、「みどりさんも、世の中の全部の人も、そして貴方もそれから私の私自身さえも、長い一生騙し切つてやろう。(傍点筆者)」（六十四頁）と決心し、みどりの方も、「貴方が私を騙すなら、私も貴方を騙してやろう。(傍点筆者)」（四十二頁）と言っている。

他人を欺すというのは、他人が何らかの意味で目に見えない犠牲となることではないだろうか。そして、そこにはやはり、エゴイズムが存在しているのである。

目に見えない他人の犠牲で成り立つ秘密——これが三杉の言う「人間の持つている蛇」なのではないだろうか。もちろん、三杉自身も、蛇を持っている。彼の蛇は、「みどりの蛇も、彩子の蛇も、彼(三杉のこと)筆者注)はその正体を知っている(六十八頁)ながら知らぬふりをしていたということ、知らぬふりで彼女達の人生を見つめていたということを指すのではないだろうか。

みどりの蛇も、彩子の蛇も知っていたということは、大里恭三郎氏の言葉(注5)を借りれば、「はじめから(愛)の(幻)たるを知っていた」ということである。このような三杉が、彩子(注5)を本気で愛したとはどうしても考えられない。彩子の、三杉に対する愛が偽りのものであったと同様に、三杉の、彩子に対する愛もまた偽りであったと見る方が妥当ではないだろうか。

彩子は、前夫門田を通してしか三杉を見ていなかったのだが、三杉は、猟銃を通してしか彩子を見ていなかったのであろう。いや、彩子だけではない。妻のみどりも、他の人間も、猟銃を通してしか三杉の目に入つてこなかったのではないだろうか。そして、三杉にとって猟銃とは、自分と他人とを隔てる働きをするものではなかったか。既に、「人間の持つている蛇」に気づいていた三杉は、蛇から自分を守るために、猟銃が必要だったのでないだろうか。他人の蛇が自分にかかわつてこないように、猟銃によって「武装しなければなら」(九頁)なかったのではないだろうか。

他人の蛇とのかかわりを避ける——これは言い換えると、他人との深いかかわりを避けることになる。そして、人生において他人との深い関わりを避けながら生きていくことは、八木義徳氏の言われるように「実人生から(注6)おりの」ということになる。

実人生からおりた三杉は、「冷たい無表情と無関心」(十一頁)な目で、自分を含めた人間というものを見つめ

ていたに違いない。そして、「私」が三杉の背景に感じたという「白い河床」とは、この人間に対する「冷たい無表情と無関心」を言うのではないだろうか。三杉は、「人間の持っている蛇」に気づき、その蛇ゆえに人間は孤独な存在であると悟るのであるが、このことに嫌悪感を抱いている様子は無い。あくまでも「冷たい無表情と無関心」のままである。いや、彩子の通夜の晩のことを「おじさま（三杉のこと＝筆者注）はそれはそれは静かな視線で、じいっと母さん（彩子のこと＝筆者注）のお写真をお見詰めになり、そして悲しそうな顔に、誰にも解らぬような微かな笑いをお作りになるのです」（二十九頁）と薔子が言っているところを見ると、三杉は、孤独な存在としての人間を受け入れていると考えてもよいのではないだろうか。人間は本来孤独な存在なのであるから、孤独のために死ぬには当たらないのだよと、彩子を労っているのではないだろうか。つまり三杉は、人間はもともと孤独な存在であり、どのような関係においても「孤独」は消え去ることはないのだと悟り、自分を含めた人間に対して「冷たい無表情と無関心」になることによって、死とは無縁に生き続けるのである。

#### 結び

夏目漱石の『こころ』——「先生と遺書」と井上靖氏の『弾銃』という二作品を取り上げ、この二作品に共通したテーマである「人間の孤独」が、それぞれどのように描かれているかを考察してきたわけであるが、ここにまとめて

みたいと思う。

『こころ』において、先生は、他人に見つけていたのと同様のエゴイズムを自分にも見てしまったために、自分の世界から自分を含む人間全体を拒絶しなければならなくなってしまった。つまり、唯一頼るものとしてない完全な孤独の状態に陥るわけである。

しかしながら、この「孤独」は、あくまでも自分可愛さに他人を欺すということ、言い換えればエゴイズムから引き起こされたものであり、その根底には「人間の罪」という意識が存在する。「人間の罪」即ち、他人の犠牲なしにはあり得ない人間の存在のことである。そして先生は、「孤独」と「人間はエゴイスチックな存在である」という二つの問題から一挙に脱出する手段として死を選んだのである。一方、『弾銃』において、三杉穰介は、「人間の持つ蛇」を認識し、愛人彩子にも妻みどりにも、そして自分自身にも蛇の存在を認めている。もちろん、人間はその蛇ゆえに孤独な存在であるのだが、三杉は、「孤独」を蛇から引き起こされたものだとは捉えていない。蛇も「孤独」も、共に人間が存在していく上で消すことのできないもの、言い換えれば、人間は本来、それぞれの心に蛇を持った孤独な存在であるということを肯定しているのである。

人間の存在をそのように肯定しているからこそ、三杉は、「実人生からおり」て自分を含めた人間全体に対し「冷たい無表情と無関心」になることはあっても、「孤独」ゆえに自己を抹殺することはないのである。

このように、井上靖氏は、『猟銃』において本来孤独な存在としての人間を三杉に肯定させることによって、かつて夏目漱石が『ころ』において、先生の自殺で締めくくった「人間の孤独」というテーマに一つの解決を見出したと考へてもよからう。つまり、孤独な存在としての人間を肯定するか否かによって、先生と三杉穰介の運命の違いが生じたのである。

△注▽

1. 福本 彰 近代文学への彷徨苦悩と孤寂への測鉛  
笠間書院
2. 『ころ』——「先生と私」(二十八) 本文参照
3. 越智治雄 「ころ」国文学 昭四十四年六月号
4. 江藤 淳 決定版夏目漱石 新潮社
5. 大里恭三郎 井上靖と深沢七郎 審美社
6. 八木義徳 脱落者の悲哀 国文学

昭和五十年三月号